

野鳥たより

—北海道—

第 3 5 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和54年3月21日



オナガガモ ウトナイ湖畔 1978. 3. 撮影 長井 博



も く じ

探鳥地案内 北村の鏡沼	白 沢 昌 彦	2
濤沸湖周辺の野鳥	城 殿 博	3
新年懇談会	新 宮 康 生	8
中国見聞報告	長 井 博	9
果実を食べる鳥と多肉果をつける樹木との関係	齋藤新一郎	10
道東の鳥のノートから	百 武 充	11
さ え ず り		12
カワセミの写真展を見て・多摩川から・標識をつけた オオハクチョウについて・青い鳥よこい		
後志・檜山地方の鳥相：夏の記録から	小 川 巖	14
探鳥会報告	小樽港・藤の沢・野幌	14
探鳥会案内		16
鳥 民 便 り		16

探鳥地案内に今号から番号をつけることにしました。これまでの案内には番号はありませんでしたが、次のようにみなすことにします。

29号 石狩川河口 ① 29号 鶴川河口 ② 33号 新得山 ③ 34号 函館山 ④

カモ類の群集地 北村の鏡沼

探鳥地案内

コガモ、マガモを中心に500羽くらいみることができた。

◆見られるカモ類 マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハンビロガモ、キンクロハジロなど。

◆位置 空知郡北村 岩見沢市より北西約10km

◆概況 北村地区はそのほとんどが水田地帯となっており、鏡沼の近くには石狩川が流れ、三日月湖その他大小の沼が点在している。

鏡沼は、北村牧場（北村昌次氏経営）が所有する周囲約800mの沼で、縁にはヨシがはえ、まわりは樹木に囲まれている。

◆交通 岩見沢駅前の中央バスターミナルから「月形行」または「北村循環」に乗る。「月形行」に乗った場合は牧場入口で下車、左手前方に牛舎、サイロが見える。「北村循環」バスの場合は北都入口で下車、月形方向に向かって約700m。

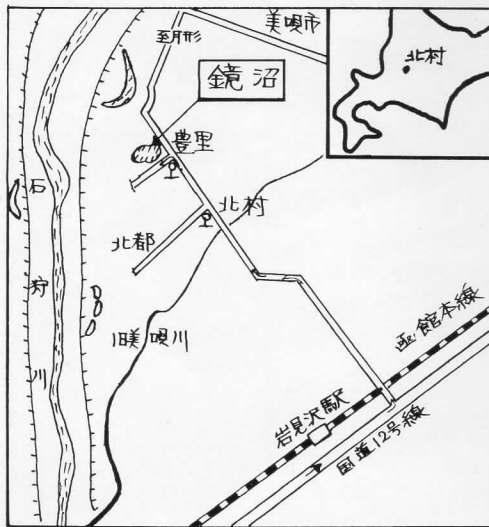
◆探鳥の時期 この沼をご紹介する一番大きな理由は10月1日の狩猟解禁とともに、ハンターの手をのがれて多数のカモ類がやってくるからである。夏期にはカイツブリやパンなども見られるが、やはりここではカモ類を見るのが一番だ。

従って、時期としては10月に入ってからが一番良く、昨年10月末に行った人の話ではカモ類が約1,500～2,000羽いたとのことで、私が行った11月23日も

⑤

◆地図 5万分の1 当別

◆その他 鏡沼は、私有の沼なので観察には特にマナーを守りましょう。（白沢昌彦）



とう ふう 濤 沸 湖 周 辺 の 野 鳥

城 殿 博

1972年4月24日早朝、シベリア方面への旅立ちを間近に控えておびたしい数の水鳥で賑う濤沸湖に足を運んで以来、その周辺に水鳥以外の鳥が生息するのもも適当な、森林、畑地、海岸などの多様な環境のみられるこの場所の魅力にとりつかれてしまった。すでに6年以上も前のことになってしまったが、その後これまでに私自身が確認、記録することのできた野鳥を本誌をお借りして報告したい。

観 察 期 間

昭和47年4月～昭和52年11月までの4年6ヶ月
(昭和51年5月～昭和52年4月は観察を一時中断)

観 察 地 域

濤沸湖と湖をとりまく内陸の一带と沿岸の海域。

調 査 環 境 の 概 略

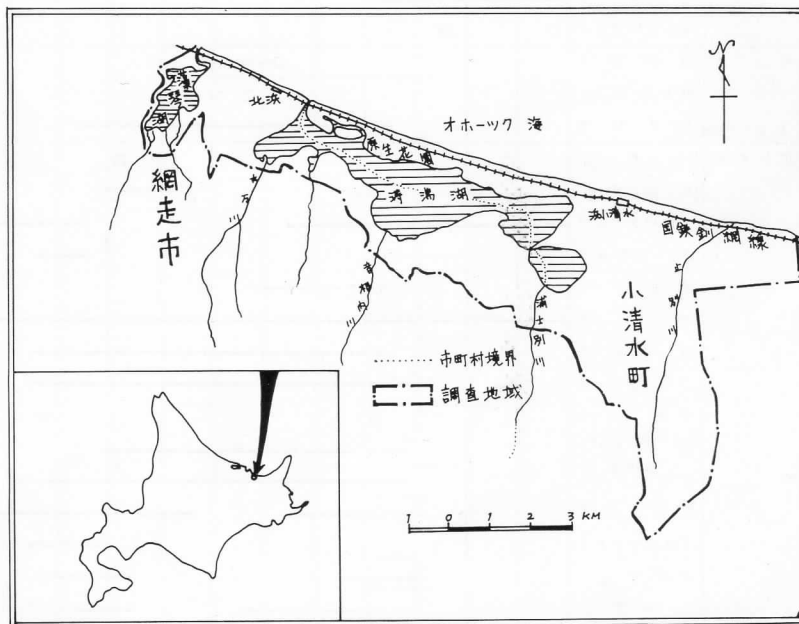
オホーツク海に面した海岸線が知床半島にかかって急な弧を描く寸前あたりに、海の波浪と河川の堆積作用によって外海と分け隔てられた濤沸湖がある。周囲は約8km、水深は最大で3m、平均で1mにも満たない、海岸に沿って細長く伸びた海跡湖である。湖の西北端が海と連結するので潮の影響が強く、汽水域が湖の3/5以上に及ぶ。湖畔には夏の間牛馬が放たれるので植生に与える影響が強く、ハマナスなどの灌木類、ヒオウギアヤメやセンダイハギなどの草本類等の放牧された家畜類が食さないものだけが正常な生育をする以外には常に植生の丈が低い。また、家畜の排泄物が湖内に流入して湖の富栄養化を促進するなど放牧による影響は多岐にわたっている。湖は11月中に湖岸から結氷を

開始し、1月にはほぼ全面が凍結するが、最近は、北浜地区の湖岸が越冬ハクチョウのために人為的に開水面が保持されている。西隣にある藻琴湖は冬期間は全面凍結する。

濤沸湖と海との間には、なだらかな起伏をうった俗に原生花園と呼ばれる地勢が続いている。この一带の植生は、ハマナス、エゾノコリンゴ等の低灌木に多種多様の草本類が混在し、夏には多くの草原性鳥類の生息場所を提供するし、冬にはベニヒワなどの群棲する小鳥類の採食地となる。

さらに同湖周辺には、牧草地やビート、ジャガイモ等の畑が広がり、それらの地域にはヤチダモ、イタヤカエデ、ハルニレ等の広葉樹とカラマツから成る防風林が格子状に四方八方に延びているのもこの地域の特徴である。その規模は並木程度のものから幅約100m、長さ1km以上の天然林からなる大きなものまでである。このような場所は年間を通じて森林性の鳥類の生息場所に利用される。このように水鳥や渉禽類の中継地として重要な濤沸湖の他、周辺地域の多様な環境もあいまって、野鳥愛好者にとっては格好の調査地域となっている。

濤 沸 湖 周 辺 図



鳥相の概要

観察された鳥は44科218種である。日本鳥類目録改訂第5版(1974)によると、北海道産とみなされているのは56科344種であるから、調査地域でいかに多くの鳥種が記録されたかがうなづける。218種のうち繁殖が確認されたのは80種である。この中には、北海道以外では針葉樹林帯にもっぱら限られているヒガラ、キバシリ等の繁殖が平地の天然防風林で確認された。一方、濤沸湖や隣接する藻琴湖では相当数のカモ類やバン類等が繁殖した。

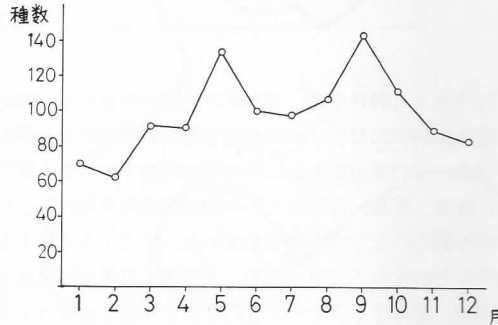
毎年、きまって見られる種類以外に珍種とみなされる鳥の記録もある。水・渉禽類では、アメリカヒドリ、カラフトアオアシシギ、陸鳥ではヤツガシラ、シラガホオジロ、ツメナガホオジロ、アカマシコ等があげられる。

月別の確認種数推移をみると、5月(135種)と9月

(144種)をピークとする二山型となる。最低は厳寒2月の63種である。5、9両月にピークがみられるのは、この時期が夏鳥と冬鳥の移行期にあたるのと、旅鳥であるシギ、チドリ類の渡来期が重なるためと思われる。

(北大農学部応用動物学教室)

月別確認種数



濤沸湖周辺の野鳥リスト

- 筆者自身が確認
- (1回のみの記録)
- 生息の可能性がある

昭和47年4月～昭和52年11月
(昭51年5月～昭52年4月は除く)

科名	種(亜種)名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備	考
アビ	アビ					—				—					
	オオハム					—				—				沖合で確認	
	シロエリオオハム					○				○	○				
カイツブリ	カイツブリ					—	—	—	—	—				濤沸湖(以下T湖)藻琴湖(同M湖)で繁殖 S 48.9.21-10.6 T湖 S 50.9.29 T湖 T湖で繁殖	
	ハジロカイツブリ										—				
	ミミカイツブリ									○					
	アカエリカイツブリ					—	—	—	—	—	—	—	—		
ミスナギドリ	フルマカモメ											—	○	S 48原生花園沖合	
ウ	ウミウ	—	—	—	—	—					—	—	—	知床岩壁で繁殖	
	ヒメウ	—	—	—	—	—					—	—	—		
	チシマウガラス	○		○									○	S 50.52.いずれも流水上で	
サギ	ヨシゴイ							○	—					S 48 T湖で幼鳥3羽を確認	
	サンカノゴイ							○						S 48 M湖で記録	
	アオサギ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	網走湖畔で繁殖	
ガンカモ	マガシ										○			S 52 ヒシクイの群れに混じる	
	ヒシクイ					—				—				T湖	
	オオハクチョウ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	T.M両湖と付近の河川	
	コハクチョウ										—			S 49 T湖に2羽	
	オシドリ					—	—	—	—	—	—	—	—	S 48.50 T湖で1つがい記録	
	マガモ													T.M両湖で繁殖	
	カルガモ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	同上	
	コガモ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	T湖で繁殖	
	トモエガモ				○								—	S 48秋、50春に渡来	
	ヨシガモ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	S.49 T湖で営巣確認	
	オカヨシガモ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	T.M両湖及び周辺で繁殖	
	ヒドリガモ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	渡来数が最大	
	アメリカヒドリ										—	—	—	S.49 T湖で3羽確認	
オナガガモ				—	—	—	—	—	—	—	—	—			
シマアジ				—	—	—	—	—	—	—	—	—	湖以外にも湿地の水溜りで少数記録		

科名	種(亜種)名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ガンカモ	ハンビロガモ				—	—					—	—		} T湖よりM湖で多い。 } 海岸にも出る } 海上が氷結していない時に } いつも確認 } S.49春、秋T湖が海との連 } 絡水路で記録 } T湖と海上のみ } 大群だが他種は混じること } 少ない (T湖) } 少数
	ホシハジロ				—	—					—	—		
	キンクロハジロ				—	—					—	—		
	スズガモ				—	—					—	—		
	ウロガモ	—			—	—					—	—		
	ピロードキンクロ	—			—	—					—	—		
	シノリガモ			—	—								○	
	コオリガモ	—			—	—							—	
	ホオジロガモ	—			—	—							—	
	ミコアイサ	—			—	—			—					
	ウミアイサ	—			—	—			—					
カワアイサ	—			—	—			—						
ワシタカ	ミサゴ				—	—				○	—	○		この地域で繁殖か 繁殖の可能性大 繁殖 " かつてT湖畔で繁殖
	トビ				—	—								
	オジロワシ				—	—						—		
	オオワシ				—	—						—		
	オオタカ				—	—						—		
	ツミ				—	—	○	○			○			
	ハイタカ				—	—	○	○			—			
	ノスリ				—	—								
ハヤブサ	シロハヤブサ	○	○	○										S48.1, S50.1.2 T湖畔で記録 S.49小清水町浜小清水地区で記録 繁殖の可能性大(8月頃から筑島づれて見る) S49~50止別地区で記録
	ハヤブサ											—		
	チゴハヤブサ				—	—						—		
	コチョウゲンボウ				—	—						—		
	チョウゲンボウ				—	—						—		
ライチョウ													繁殖	
キジ	ウズラ						—	—						"
	(コウライキジ)						—	—						"
ソル	タンチョウ													S50までT湖畔に2羽記録
クイナ	クイナ												—	繁殖 " " "
	ヒメクイナ						○	—	○					
	ヒクイナ						—	—	—	○				
	バン						—	—	—	—				
チドリ	コチドリ				—	—								海岸で確認 S49のみ記録 T.M両湖で記録 " " "
	イカルチドリ				—	—							—	
	シロチドリ				○	—								
	メダイチドリ				○	—					—	—		
	ムナグロ				—	—					—	—		
シギ	ダイゼン												—	"
	キョウジョシギ					○	—			—	—			"
	トウネン					○	—			—	—			"
	ヒバリシギ					—	—			—	—			"
	ウズラシギ					—	—			○	—			"
	ハマシギ					—	—			—	—			"
	コオバシギ					—	—			—	—			S48M湖で1羽
	オバシギ					—	—			—	—			T.M両湖
	ミユビシギ					—	—			—	—			"
	ヘラシギ					—	—			○	—			"
	エリマキシギ					—	—			—	—			"
キリアイ					—	—			—	—			"	
ツルシギ					—	—			—	—			"	

科名	種(亜種)名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考	
シギ	コアオアシギ									○				S 48M湖で1羽	
	アオアシギ									—				T.M両湖	
	カラフトアオアシギ									○				S 48T湖で1羽	
	クサシギ					—				---				T.M両湖	
	タカブシギ					—				—				"	
	キアシシギ									—				"	
	イソシギ					—				—				T湖周辺で繁殖(S 49巢発見)	
	ソリハシシギ										—			T.M両湖	
	オグロシギ										—			"	
	オオソリハシシギ										—			"	
	ダイシャクシギ										○			S 49T湖で各1羽記録	
	ホウロクシギ									○					
	チュウシャクシギ										—				T.M両湖
	ヤマシギ										—				繁殖
タシギ										—				T.M両湖	
オオジシギ										—				繁殖	
ヒレアシギ	ハイロヒレアシギ											○		S 47T湖で2羽記録	
	アカエリヒレアシギ									—				T湖	
ツバメチドリ	ツバメチドリ									○				S 48T湖で若鳥1羽	
カモメ	ユリカモメ				—						—			単一種群でいることは少ない	
	セグロカモメ	—			—						—				
	オオセグロカモメ	—			—						—				
	ワシカモメ	—			—						—				
	シロカモメ	—			—						—				
	カモメ	—			—						—				
	ウミネコ	—			—						—			S.48.3.S.49.50.52少数記録	
アジサシ			○		—					—					
ウミスズメ	ウミガラス	—		—										原生花園付近沖合	
	ケイマフリ	—		—											
	マダラウミスズメ	—		—											
	ウミスズメ	—		—											
	エトロフウミスズメ	—		—											
	エトヒリカ	—		—											
ハト	キジバト	—		—										繁殖	
	アオバト									—				"	
ホトギス	ジュウイチ									—				"	
	カウコウ									—				"	
	ツツドリ									—				"	
フクロウ	シロフクロウ												—	S 51.1羽記録(竹田氏による)	
	トラフズク					○								S 50.1羽天然防風林	
	コミミズク										—			海岸砂丘、牧草地に生息	
	コノハズク					○								S 49天然防風林に1羽	
	オオコノハズク					○								"	
	フクロウ					○								繁殖(天然防風林)	
ヨタカ	ヨタカ													"	
アマツバメ	ハリオアマツバメ									○					
カワセミ	ヤマセミ													繁殖(S 49巢立幼鳥3羽と親)	
	カワセミ										—			M湖畔で繁殖	
ヤツガシラ	ヤツガシラ													S 48海岸砂丘に1羽	
キツツキ	アリスイ													防風林、海岸付近で繁殖	
	ヤマゲラ													天然防風林	
	クマゲラ					○	○	○	○					S 48T湖畔付近の林で雌1記録	
	アカゲラ													繁殖	
	オオアカゲラ													"	

科名	種(亜種)名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
	コアカゲラ コゲラ	-----												S 49天然防風林で繁殖 繁殖
ヒバリ	ヒバリ				-----									繁殖(牧草地に多い)
ツバメ	ショウドウツバメ ツバメ イワツバメ						-----	○						崖地でコロニー S 49.7.20.2羽記録のみ 知床:ウトロ付近で繁殖
セキレイ	キセキレイ ハクセキレイ ビンズイ タヒバリ	-----												繁殖(S 49.7.2雛4羽の巣発見) 海岸の流木、人家に営巣 防風林林縁部に営巣 T.M両湖畔や湿原に多い
ヒヨドリ	ヒヨドリ													繁殖(人家周辺の常緑樹にも営巣)
モズ	モズ アカモズ オオモズ													S 49越冬個体2羽 繁殖(海岸付近に集中) S 49は5.21まで確認
レンジャク	キレンジャク	-----												
ミソサザイ	ミソサザイ	-----												
ヒタキ	ノゴマ コルリ ルリビタキ ジョウビタキ ノビタキ イソヒヨドリ トラツグミ クロツグミ アカハラ シロハラ ツグミ ヤブサメ ウグイス エゾセンニュウ シマセンニュウ マキノセンニュウ コヨシキリ オオヨシキリ メボソムシクイ エゾムシクイ センダイムシクイ クイタダキ キビタキ オオルリ コサメビタキ													繁殖(海岸砂丘に多い) S 49.5.13海岸付近の記録のみ S 48.12.25生垣で 繁殖 S 50.11.3・23止別河口 繁殖 " (少ない) " S 52.10.3~10防風林内で 繁殖(S 49.5.10巣発見) 繁殖 " " " S 48.7.9囀り中の雄1羽 S 49.5.8海岸付近の灌木内で1羽 S 49.5.19.6.3天然防風林で1羽 S 50.52海岸砂丘灌木内で1羽 S 49天然防風林 繁殖 繁殖
エナガ	(シマエナガ)													"
シジュウカラ	ハシブトガラ コガラ ヒガラ ヤマガラ シジュウカラ	-----												" 冬期にのみ平地林にも見られる 天然防風林にも少数繁殖 S 48.12.25~49.1.9人工給餌台に 繁殖
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ													
キバシリ	キバシリ	-----												平地の天然防風林にも少数繁殖
メジロ	メジロ							○						S 48.8.19.3羽を天然防風林で
ホオジロ	シラガホオジロ ホオジロ ホオアカ カシラダカ	-----												S 49.1.10~3.7に天然防風林で2羽 S 50に雄1羽を見ただけ 繁殖 海岸砂丘、湖畔に少数渡来

科名	種(亜種)名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	備考
ホオジロ	シマアオジ					—								湖畔、海岸砂丘で多数繁殖 多様な環境で繁殖 数多く繁殖 S49.2.18~3.4.ユースホテル庭で2羽 春の渡り時には300羽を超えることもある
	アオジ					—								
	オオジュリン					—								
	ツメナガホオジロ			—										
	ユキホオジロ			—										
アトリ	アトリ	—												年により個体数かなり変動する 越冬個体も少数ながらいるようだ 森林に少数繁殖するが、秋に数が多い S49、52に渡来数が多かった 海岸砂丘や畑地に見られた S49.3.21オオマシコ群れに1羽混じる 林縁部や畑地で少数 年によって渡来数かなりむらがある 越冬個体がS49にあった。多数繁殖 防風林に多い 少数がウソに混じる 繁殖 普通に繁殖するが、冬は少ない
	カワラヒワ	—												
	マヒワ	—												
	ベニヒワ					—								
	ハギマシコ	—												
	アカマシコ			○										
	オオマシコ			—										
	イスカ	—												
	ベニマシコ	—												
	ウソ	—												
	(アカウソ)			—										
ハタオリドリ	ニュウナイスズメ					—								防風林で普通に繁殖。煙突やパイプなどの人工物にも営巣 人畜に囲って繁殖。冬は生害に多い。
	スズメ					—								
ムクドリ	コムクドリ					—								繁殖
	ムクドリ				—									
カラス	(ミヤマカケス)													冬期に山地から平地に下りてくる 繁殖 冬期に少数
	ホシガラス	—												
	ハシボソガラス													
	ハシブトガラス													
	ワタリガラス	—												

注)原則として亜種名の記載は省略したが、外見上容易に識別がつかぬ亜種については()をつけて示した。

スポット

小鳥の村の記録

今年も札幌市藤の沢の小鳥の村の記録がまとまりました。ガリ刷り、45ページで、コムドリリの標識放鳥や、このコムドリリの渡りの先と思われる東南アジアの子供へ文通の呼びかけなど、藤の沢小学校の子供たちの記録が盛り込まれています。小沢名誉村長がニコニコしながら報告にみえました。

新年懇談会

新宮 康生

1月27日、13:30~17:00、本会事務所のある札幌市中央区北4条西5丁目「林業会館」3階会議室で、恒例の新年懇談会が開かれました。

当日、会が開かれる頃からは、午前中の穏やかな日和とは違って変わった吹雪模様の天候となりましたが、久々の会合でもあり、熱心な会員各位のご協力と、中には吹雪の中を、帯広からかけつけて下さった方もあったりして、参加者は前回に倍加する盛況を呈しました。

始めに、土屋副会長の新年のごあいさつとお話があり、続いて、お菓子やミカンをつまみながら、参加者各位の自己紹介をかねた野鳥観察近況報告がなされ、今冬の冬鳥の情報が交換されました。

次いで、会の運営やあり方についての話し合がもたれ、特に探鳥会のあり方について、意見や希望が出され、今後の探鳥会にとって有意義なひとときでありました。

最後に参加者各位が持ち寄られた、野鳥と植物のスライドの映写会を楽しんだ後散会しました。

〔参加者〕

佐藤 実 小川 巖 豊島博男 村野紀雄 猪口 卓・則子 谷口一芳・登志 曾根モト 半沢正九郎 土屋文男 新宮康男 白沢昌彦 野々村 菊 野口正男 早瀬広司 柳沢信雄・千代子 平井さち子 羽田 恭子 萩 千賀 梅木賢俊 大森信善 平沼 裕 宮 崎政寛 荻谷昭道 長井 博 新妻 博 (記名順)



中国見聞報告

長井 博

私は昨年7月に、友人4人と共に中国再訪2週間余の旅をしてきた。中国で客死した友人の7回忌に出席するだけの目的であったから、それに費した半日以外の時間は、全く自由であった。

私の場合、美術陶芸等に興味があったり、妻と共にアイヌ文化の伝承者、萱野茂氏の作業を手伝ってきた関係上、古代の技術文化や少数民族文化の伝承に特に興味が有り、大半はその方面の見聞に時間を費した。したがって野生鳥獣研究方面の見聞は、その次になった事を、まず告白しておこう。

野生鳥獣の研究機関

中国で野生鳥獣の研究調査をしている機関は、主に3種類あって、その第一が科学院直轄の動物研究所である。この正式な研究所は5箇所あるというが、私がコンタクトを取ったのは、北京と雲南の2箇所だけである。開設以来はじめての外国人研究者？ ということで、質問責めの歓迎を受けてしまった。他の3箇所の所在地は聞きもらした。種々の報告書を見るかぎり、仮設の施設はその他にもあると思われる。数人の学者が何の援助もなしに辺境の地へ赴き、そこで食住の自活をしながら調査研究を続け、それが政府直轄の研究所に昇格したという例がしばしば見られるのだから、その可能性はきわめて強い。

第二は大学である。北京大学の場合は、生物学部、動物学科で野生鳥獣の研究をしている。他の大学については訪問していないので解らないが、文献には理学部から調査報告を出しているものもある。しかし現状ではまだ、生物学部がこの分野を担当している傾向が強いと思われる。

第三は動物園だと聞いた。北京と広州で動物園へも行ったが、そこに集まる野鳥を見ている内に、研究者と会



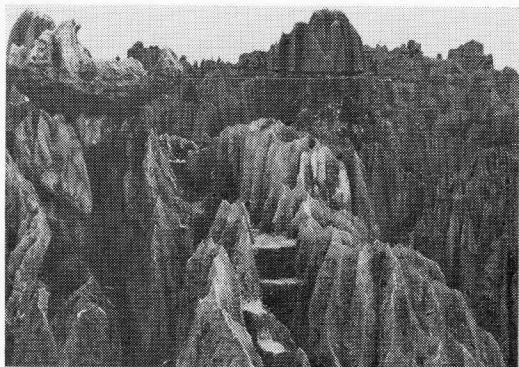
う事を忘れてしまったので、どのような研究をしているのか解らない。捕獲するために数箇月間も山に入ったとか、繁殖の調査に入ったとかいう話は聞いたが、前記二例とは違って動物園の性格と合致した調査なのである。パンダもそれにしてやられたくちであろうか。

研究分野は？

文献を見る限り、人工飼育等生態に関するものもないわけではないが、中国における鳥類研究部門の全体像は、まだ区系一本やりといった印象を受けている。科学院で鳥類部門の最長老、世界的な学者、鄭作新博士も分類学のオーソリティーである。ベテランとして私に紹介された鄭宝寶、彭燕章、匡邦郁、柳嵐の各先生もみな、直接間接に鄭博士の弟子であった。

彼等の主たる調査研究は何であろうか。彼等の言う分布調査であろう。ラインセンサスといったなまやさしいものではなく、捕獲し、計測し、ラベルを付して学術標本を作るといった、折居彪二郎氏の時代と大差ない作業に思われる。これは単なる推測ではないつもりだ。中国ではまだ鳥類図鑑が出版されていない。雲南の研究所には、外国の図鑑も入っていなかった。鄭博士は、亜種も含めて2,077の鳥類を報告しており、この識別を図鑑なしで完全に覚えるのは無理だと思う。また私に対する質問もその辺の問題に集中していた。

中国の鳥類研究は、先進諸国や国内の他の研究部門と比較しても、かなり遅れており、追いつくにはまだかなりの年月を必要とするだろう。紙面の都合で中途半端な報告になってしまったが、この続きは別の機会に譲りたい。
(〒061-01 札幌市豊平区東月寒235)



雲南省路南県の海底隆起による景観

果実を食べる鳥と 多肉果をつける樹木との関係

齋藤新一郎

鳥と木の実との相互関係については、これまでに、鳥の研究者による多くの研究が行われてきました。黒田(1967)の研究はその代表的なものですし、鳥の食べる果実をつける樹種のリスト、樹木に集まる鳥のリストなども充実しつつあります。

けれども、鳥と果実の関係について、樹木の研究者ないし森林造成の研究者からみた研究は、あまり発表されていません。その一因は、風散布樹種の造林や天然更新が主体となっているからです。対象樹種は、針葉樹のトドマツ、エゾマツ、カラマツであり、広葉樹のシラカンバ、ケヤマハンノキ、ヤチダモ、ドロノキなどです。つまり、鳥との相互関係——果肉を与え、種子を散布してもらう——はなく、これらのたね(散布体)はせいぜい単なる食物でしかありません。むしろ、林学者にとっては、多肉果樹種は造林木の邪魔者ないし雑木なのです。雑木とは、材価が安く、利用価値が乏しく、どうでもよい木のニュアンスです。

樹木のたねの散布には、風、自然落下、水流、動物などがあり、森林成立の上からは、風と動物が重要です。風散布樹種は一斉林を、動物散布樹種は複雑な林をつくる傾向にあります。動物のうち、クマ、リス、ネズミなども散布者になりましようが、距離や量において、鳥のウエイトは極めて大きいにちがいません。

鳥が食べて、たねをまく樹種は、高木～小高木に限ると、およそ次のようです。なお、たねイコール種子ではありません。

果実	たね	樹種
多肉果 核果	内果皮+種子	エゾヤマザクラ、シウリザクラ、エゾエノキニガキ、ヤマウルシ
液果	種子	ハリギリ、タラノキ、エゾニワトコ、ツタ
みかん果	種子	キハダ
りんご果	種子	ナナカマド、アズキナン、エゾノコリンゴ
きいちご果	内果皮+種子	ヤマグワ
袋果	仮種皮つき種子	ホオノキ、モクレン
仮種皮つき種子		イチイ

このほかにも、低木にはイヌツゲ、キンギンボク、クマイチゴ、ツリバナなどがあり、つるにはヤマブドウ、ツルウメモドキなどがあります。

また、ドングリやいくらかのたねは、カケスやカラス類に貯蔵され、食べ忘れられたものが発芽します。

多肉果の進化は、鳥に好食され、その見返りにたねを散布してもらう方向にあると考えられます。私はこれについて、次のように考えています。①果実が大きくなるし、多数つく、②果皮の色が鮮明になり、③果肉の肥大があり、④種皮ないし内果皮が硬化発達する。

②の色については、唐沢(1978)によると、常緑樹では緑葉を背景にした赤熟果がふつうであり、落葉樹では枝に果実のみを残すことが多いのです。薄暗い林床の低木類の多くは鮮やかな赤～オレンジ系統の多肉果をつけますし、高木でも多くの果実は房や穂に集まっていますから、鳥の食物さがしに役立ちます。この果実の色は、果実食鳥に対するディスプレイとみられます。

④の硬化は、果肉だけが消化されて、たねは消化されてはならないからです。それゆえ、多肉果をつける樹種は、苗木づくりにおいては、発芽しにくいたね(硬実という)をつけます。私たちは、種皮が硬化しないようにと、また土中で春までにバクテリアが種皮をいくらか腐らせるようにと、秋にすぐたねまきします。これを、鳥散布とは関係なく、とりまきといえます。

風散布樹種のたねは、鳥にとっては単なる食物です。それで、これらの果実は褐色系統が多く目立ちません。裸子植物のイチイは、仮種皮をもつことにより、被子植物のようなたね散布をして、今日も生残っています。

おわりに、鳥と森林の関係を観察する方法について述べますと、①鳥が木の実を食べている様子、②鳥の糞中のたね、③とまり木の下や周辺の実生、④人工林内に侵入した稚苗・若木、⑤若木と親木の距離などです。③は都市でも観察できますし、都市植生と果実食鳥の研究につながります。④は私たち林業研究者がもっと力を入れなければならない分野と考えられます。

多肉果樹種をたくさん植えて、花や葉とともに、美しい木の実を楽しみ、野鳥にも食物を与えましょう。

参考文献

- 黒田長久 1967 鳥類の研究一生態. 320p., 新思潮社.
齋藤新一郎 1976 苗木育成からみた樹木種子の運搬者としての鳥類の役割について. 鳥, 25: 41~46.
唐沢孝一 1978 都市における果実食鳥の食性と種子散布に関する研究. 鳥, 27: 1~20.

(〒098-28 中川郡中川町中川430-40)

道東の鳥のノートから

百 武 充



私は1974年7月から1977年8月まで、弟子屈町川湯に住んだ。その間、本誌26号に「川湯周辺の鳥」として7年1月までの記録を報告したが、その後の記録と、ホームレンジ以外の道東各地で観察した鳥のうち、この地方では少ないと思われるものをまとめておきたい。

川湯周辺の鳥補遺

1977年2月から8月までの間のノートから、下記のとおり記録の追加をする。

1 新しく記録した種類

ノゴマ 1♂ 5月21・23日 川湯温泉

ツミ 1羽 6月10日 仁伏

エゾセンニュウ さえずり 6月25日 池の湯

アカショウビン さえずり 6月28日 川湯温泉

上記4種を追加できた。これで、私が川湯周辺で観察した鳥は、本誌26号の129種と合わせて133種である。

2 夏のイスカ

1977年7月から9月にかけて、川湯付近と藻琴山の針葉樹林帯でイスカの群を観察した。近くで姿を見たのは7月12日（川湯、約10羽）と8月10日（藻琴山、3羽）であるが、その他確認には至らなかったものの、大きさや形からイスカ以外に考えられない10~20羽の群が飛ぶのを、川湯温泉周辺で数回観察している。

道東の鳥

1 メジロ

1976年8月27日に知床岬でメジロを観察した。このことについては、本誌30号（第1回野鳥調査のまとめ）及び31号（濯白の野鳥）で言及されているが、改めて観察時の状況を記しておく。

場所は知床半島の突端、知床岬燈台の直下である。岬付近は草原であるが、燈台付近より上部斜面と南側の平地はミズナラを主林木とする広葉樹天然林がおおっている。この、草原との境に近いところで、近くの木にとまる2羽の姿を観察した。他にも樹冠内でさかんに声がしていたので、おそらく5羽以上の群であったと思う。2羽のうち1羽は背面の緑色が非常に淡く、若鳥のようであった。

メジロは道東・道北ではきわめて稀で、繁殖もおそらく確認されていないと思われる。しかし、知床岬付近の広葉樹林は、夏季の相観はメジロの好む暖帯の常緑カン林にかなり似ており、冬季は移動するとしても、ここに隔離的に分布繁殖する個体群があっても決しておかしくはないという印象を受けた。南千島方面とのつながりの可能性も含めて、今後の調査に期待したい。

2 ツバメ

1974年11月19、26、30日の3回にわたり、斜里町市街地内でツバメを観察した。いずれも1羽で、場所も斜里駅から役場西方まで約1キロの範囲内に限られている。

しかし、26日に観察した個体は他の2回に較べて明らかに尾が短く、全部が同一個体であったとは信じられない。11月の斜里はすでに真冬であり、とくに19日はかなり激しい吹雪であったが、ツバメは雪の中を飛び、家屋の軒裏をのぞきこむようにしながら少しずつ移動していた。越冬しているクモや昆虫を探していたのではないかと思う。他の年にはそれほど斜里に通わなかったのが観察はこの年だけであるが、斜里町在住の森信也氏は秋冬のツバメは見たことがない由である。

本州などで越冬するツバメは大陸で繁殖するもので腹面が白くないそうである。しかしこのときは3回とも双眼鏡なしの観察であり、光線が弱かったり距離が遠かったり、腹面の色彩まで確認できなかったのは心残りである。

3 ハジロクロハラアジサシ

1976年5月22日 野付半島ポンニツタイ付近 夏羽1羽

4 ミヤコドリ

1976年5月22日 濤沸湖マルマン川河口 2羽

3と4は同じ日の観察で、当時環境庁鳥獣保護課の中島和氏と2人で見たものである。

ハジロクロハラアジサシは野付半島基部の尾岱沼側で、このあたりから幌川方面にかけて多数飛んでいたアジサシ群中に発見したものである。遠方を飛行中のものの中にも黒くみえる個体1~2羽があったが距離が遠すぎたため確認に至らず、近くに飛来した1羽のみ確認できたものである。

その後山越えて斜里側に移動してミヤコドリを見た。30分ほどの観察中ずっと同じところにおり、眠ったり、付近を歩いて採餌していた。この日は根室・網走・川湯と道東一帯の渡り鳥渡来地をめぐる、300キロ以上を走る行程であったが、収穫の多い日であった。

5 ジョウビタキ

1976年12月3日 尾岱沼市街南方で1♂を観察した。

6 タゲリ

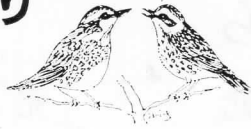
1977年4月13日 釧路湿原の東釧路一遠矢間を走る列車の窓から、飛行中の1羽を観察した。

7 ツメナガホオジロ

1974年11月10日 風蓮湖春国岱、75年12月30日 尾岱沼、77年2月26日 尾岱沼で、いずれも1羽観察した。尾岱沼ではユキホオジロと一緒に行動していた。

(〒390-15 長野県南安曇郡南安曇村126)

さえずり



カワセミの写真展をみて

谷口一芳

カメラマン嶋田忠氏のカワセミの写真展が1月16日から31日まで、札幌キャノンサロンで開かれた。この案内は「野鳥だより」で知り、三たび訪れることができ大変楽しく、野外での観察とまたこととなった感動を覚えました。

私は見る前からカワセミのもっている生きるための形態と生態、すなわち、知られざる世界の秘密にふれることの期待にあったのです。

この期待にたがわず素晴らしい30余点の作品でありました。カワセミが何を考え、何をしようとするのか、枝にとまり、ある時は水流の岩にただずみ、美しい色彩と姿態が生活環境の中で生き生きとしていたことでありました。

いままで、まれにホバリングやダイビングに遭遇しても双眼鏡から一瞬に消えてしまい、その網膜の余韻に感激するにとどまっていたのが、その瞬間をとめて見ることができたからです。雄から雌へ捧げるヤマメはお頭からさし出すしぐさにヒト以上のマナーを感じさせられたし、子そだての三態は次の展開はどのようになるかと想像させてくれました。

また、雪化粧をした岸辺の雑草にとまり、湖面をみつめる姿は日本画をみるような幽玄の世界で、静から動への間というものを感じたし、さらに自然界というきびしいおきてを直視する死体の写真も強く印象に残りました。

カワセミの世界というタイトルにふさわしい作品群で、いろいろな諸条件を克服しての決定的瞬間をものに



している嶋田氏に敬意を表したいと思います。

しかし、広くない会場に、写真展とかかわりのない打合せが行なわれており、観賞を妨げられたのは私のみでなかったこと、さらにこのよい企画がPR不足であったことはまことに残念なことでありました。

さて野鳥の写真を見て思うのですが、プロのものは見せるものを撮るし、また量的にも多いのですが、アマのものもすてがたく、1月27日の新年懇談会でも数人のスライドを見せてもらいましたが、素晴らしいものが何枚もありました。要は積極的に撮る行為の世界が、決定的瞬間のチャンスを与えてくれるものだと思います。撮る皆さんに期待してやみません。撮らない私からのねがいです。〒063 札幌市西区手稲西野4条9丁目(1979.2)

多摩川から

森 拓人

私ども、4月末に仮の住まいである川崎の多摩川河畔から東京の狛江に移ってまいりました。ちょうど多摩川をはさんで北東方向、斜め向かいというあたりです。

新しい住まいは住宅公団の神代団地というところで、最寄りの駅は京王線のつつじヶ丘です。大手町の社まで家からちょうど1時間、探鳥地の高尾山まで4・50分、聖蹟桜ヶ丘(冬鳥観察の適地)まで30分、多摩霊園まで同じく30分くらいと便利なところです。また都心に近い割に比較的緑が多く、畑もそこここにあります。先日ここへ来て初めて、高尾山に探鳥に行きました。日曜それも晴天ということもあり、鳥より人の数の方が圧倒的に多く、野幌は良かったなあ、北海道は良かったなあと思いながら歩いていました。当日見たもの(○)多いものは、

○カルガモ キジバト アカショウビン ○アオゲラ
コゲラ ○ツバメ ○ヒヨドリ ヤブサメ ウグイス
○センダイムシクイ キビタキ ○コサメビタキ ヤマ
ガラ ○シジュウカラ ホオジロ ○カワラヒワ イカル
○スズメ ○ムクドリ ○カケス ○ハシブトガラ
です。

1日歩いてこれだけですから前途多難というところですが、北海道を懐かしんでばかりはいられないので、もっと人の入らない静かな奥多摩、奥武蔵の山をフィールドに開拓しようと思っています。

多摩川の一冬の記録を同封しました。そまつなものです。が初めてまとめたものです。

多摩川の鳥(河口—聖蹟桜ヶ丘 1977. 12. 25—
1978. 4. 24 調査回数20回)

調査地点: 丸子橋付近、六郷橋—河口 関戸橋
付近(聖蹟桜ヶ丘)

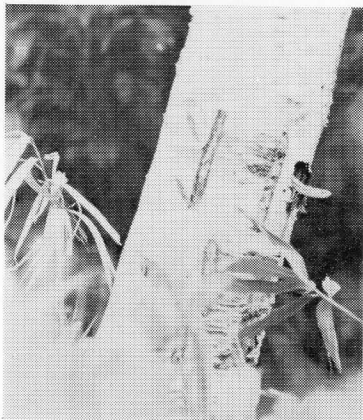
1 カイツブリ 2 ゴイサギ 3 ダイサギ 4 コサギ
 5 アオサギ 6 マガモ 7 カルガモ 8 コガモ 9 ヨシ
 ガモ 10 ヒドリガモ 11 オナガガモ 12 ハシビロガモ
 13 ホシハジロ 14 キンクロハジロ 15 ミコアイサ 16 ト
 ビ 17 チョウゲンボウ 18 キジ 19 クイナ 20 パン 21
 イカルチドリ 22 シロチドリ 23 ムナグロ 24 ハマシギ
 25 アオアシシギ 26 ツルシギ 27 クサシギ 28 タカブシ
 ギ 29 イソシギ 30 タシギ 31 ユリカモメ 32 セグロカ
 モメ 33 ウミネコ 34 キジバト 35 コミミズク 36 カワ
 セミ 37 ツバメ 38 ヒバリ 39 キセキレイ 40 ハクセキ
 レイ 41 セグロセキレイ 42 タヒバリ 43 ヒヨドリ 44
 モズ 45 ジョウビタキ 46 イソヒヨドリ 47 ミグミ 48
 ウグイス 49 オオヨシキリ 50 セッカ 51 シジュウカラ
 52 ホオジロ 53 カンラダカ 54 アオジ 55 オオジュリン
 56 カワラヒワ 57 スズメ 58 ムクドリ 59 ハンボソガラ
 ス 60 ハンブトガラス 61 ドバト 62 ベニスズメ

〒182 狛江市西野川1-25-57 (1978. 6)

ひなを呑むヘビ

藤林 忠雄

探鳥へ出かけると、しばしばヘビに出くわし一瞬ドキ
 ッとさせられる。特別ヘビを毛嫌いするわけではないが
 好感もてぬ。昨年7月野幌森林公園で探鳥会が催され
 た。この時みたのは大沢公園にあるキタコブシの木にか
 けられた巣箱でのことだったが、アオダイショウが侵入
 し、この巣箱でひなを育てていたシジュウカラの親の愛
 するひなを全部丸呑みにしてしまった。ヘビは巣箱から
 何度か身を乗り出しかけるが、シジュウカラの親が騒ぎ
 巣口近くを飛び回るためヘビはなかなか逃げられずに
 いた。わずかな隙をついてヘビはすると身を乗り出し幹
 をつたって出てきた。一体何羽のヒナを呑み込んだので
 ありう。運悪くこのヘビは子供達に掴まり、容赦なくふ
 り回されると、たまらず呑み込んでいたヒナを吐き出し



鳥の巣穴から出るヘビ

てしまった。全部で6羽、既にヘビの胃液で溶けだして
 いた。弱肉強食といえども無抵抗なひな達が食べられる
 って本当に可愛想です。かと言ってヘビを度め殺したり
 すると自然のサイクルを狂わす結果にもなり本当に困っ
 たものである。〒069-01 江別市大麻南樹町2 R15-21

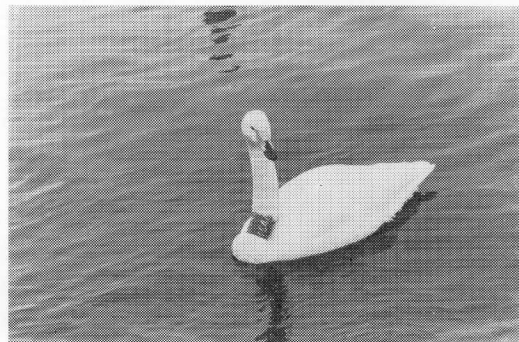
標識をつけたオオハクチョウ について

長尾 康

12月15日大沼公園に1C48の標識をつけたオオハクチ
 ョウが飛来した。

このオオハクチョウは53年3月8日に青森県の小湊で
 放鳥されたものです。

大沼にこのような標識をつけたオオハクチョウの飛来
 は初めてです。 〒041 函館市中道町30-2 窓明寮

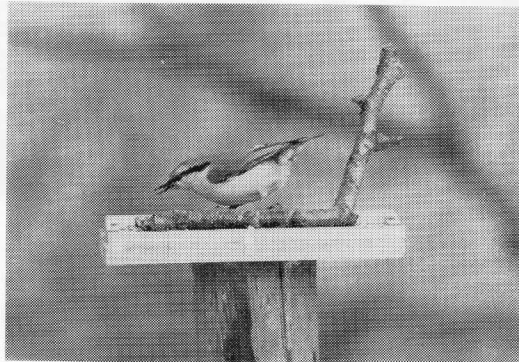


青い鳥よこい

伊藤 正清

今年も来ました。バードテーブルに、ゴジュウカラ、
 これからどんな鳥が来るのか楽しみです。でも僕は独身
 やはり一日も早く青い鳥(嫁)さんが来るのを待ってま
 す? 写真撮影 54年1月3日 室蘭測量山で

〒050 室蘭市みゆき町3-2-9 みゆき荘



後志・檜山地方の鳥相：夏と秋の小記録から

小 川 巖

これまで何らかの形で公刊されたことのある道内の鳥類に関する報告、記録は何編位あると思いますか。私が整理した限りでは、新旧とりまぜて約1,000編程度なのはと見当をつけている。もちろん、の中には随筆の類は含んでいない。たとえ1例報告であっても、各地の鳥類相を知る手がかりになるものに限っての話である。

では支庁別にみて、この種の報告が多いのはどこかご存じですか。意外なことに、石狩のほか、釧路、根室管内が御三家ということになる。逆にもっとも少ないのが後志、檜山管内。檜山には2、3編の報告があるのでまだ救われるものの、驚くなかれ後志に至っては皆無の状態なのだ。

前置きが長くなってしまったが、昨年（昭和53年）の夏から秋にかけて、たまたま鳥相の空白地帯に出かける機会があった。不完全な記録なのは承知の上で、以下愛護会のチェックリストを整理し、その一端を再録してみることしよう。（渡島管内長万部町にも立寄ったので、その記録も付記する。）

黒松内町歌才・ブナ自生林（後志管内）：7月21日
 エゾライチョウ キジバト カッコウ ツツドリ コゲラ ヒヨドリ アカハラ ウグイス キビタキ ハシブトガラ シジュウカラ アオジ イカル ハシブトガラス（14種）

寿都町寿都海岸（後志管内）：7月21日
 ウミウ イソシギ オオセグロカモメ ウミネコ キジバト ツバメ イワツバメ ハクセキレイ ノビタキ イソヒヨドリ ホオジロ ホオアカ アオジ カワラヒワ ベニマシコ ハシボソガラス（16種）

長万部町・静狩湿原（渡島管内）：7月21日
 オオジシギ ヒバリ ツバメ モズ ノビタキ コヨシキリ ホオアカ シマアオジ オオジュリン カワ



ラヒワ ハシボソガラス（11種）
 上ノ国町湯ノ岱～七ツ岳沼（檜山管内）：9月6日
 カルガモ ノビタキ ウグイス シジュウカラ（4種）

江差町竜巻山付近・ヒバ自生林（檜山管内）：9月7日
 エゾライチョウ キジバト コゲラ エナガ ハシブトガラ ヒガラ シジュウカラ アオジ ハシブトガラス（9種）

北檜山町・狩場山（檜山管内）：9月8日
 トビ ツミ ハイタカ ノスリ キジバト アカゲラ モズ カヤクグリ ノビタキ ウグイス ハシブトガラ シジュウカラ ホオジロ ウソ イカル ハシボソガラス（16種）

〒001 札幌市北区北10条西3丁目 酒井方

小樽港

53. 12. 10 10:30～13:00

梅木賢俊

「暖冬少雪」といわれた今年の冬ですが、小樽港探鳥会のこの日も暖気模様でみぞれのあいにくの天候でした。

目的の一つであるウミスズメ類が確認されなかったのは残念でしたが、それでも愛護会員はじめ野鳥の会小樽支部、江別支部の方々が40名以上も参加され、これまで



の最高でした。
 海上での探鳥後は、恒例になっている屋内での8ミリやスライド映写、そして甘酒を飲んでの懇談と有意義な一日でした。

〔記録された鳥〕 小型カイツブリ（ハジロカイツブリか？） ウミウ ヒメウ

シノリガモ コオリガモ ホオジロガモ ユリカモメ
 オオセグロカモメ シロカモメ カモメ ウミネコ ミ
 ツユビカモメ スズメ ハシボソガラス ドバト 15種
 〔参加者〕 高橋明子 武田勝利・忠義 小杉山哉史

藤原直人 佐藤和弘 絵内厚子 白澤昌彦 深村康雄
 谷口一芳・登志 井上元則・恒則 細山久男 羽田恭子
 早瀬広司・富 柳沢信雄・千代子 野々村菊 新妻 博
 吉岡義明 藤沢伸也・ひろき 竹内喜代治 津田新平
 富樫敏雄 松山佳則 天本治夫 村野紀雄・森 佐々木
 勇 梅木賢俊 渡辺俊夫 中野高明 亀尾紋十郎 吉田
 五市 小樽市北山中学校生徒7名 44名
 〔担当幹事〕 亀尾紋十郎 梅木賢俊

藤 の 沢

1979. 1. 28 10:00~14:00

天 本 治 夫

雪日の探鳥会にもかかわらず、遠く帯広、小樽からの参加もあり、総数36名でした。

終日、降雪のためか、餌台に寄りついた野鳥は、スズメ、アカゲラ、カケス、シジュウガラ、ハシブトガラなどでしたが、自然の鳥を自然の姿で、心ゆくまでのんびりと観察することが出来たのは、実に楽しかった。

昼食時には、小沢氏夫妻の心づくしの豚汁料理や、「藤の沢の水（バックス）」を御馳走になりながら、副会長の井上元則先生の鳥談を聞き、その後は、参加者全員の自己紹介と続き、探鳥会は、さながら懇親会そのものとなり、会員相互の親睦が大いにはかられたようです。

諸先輩の話の要旨は、「人間は趣味を持ち、心豊かに長生きすべきだ」ということだった。

昼食後は、野鳥の生態写真を披露してもらったり、鳥の観察情報の交換があるなど、屋内探鳥会ならではの風景で、なかなか有意義な探鳥会でした。

最後になりましたが、かかる「場」をご提供下さった小沢氏夫妻に深く感謝いたします。

〔記録された鳥〕 アカゲラ ハシブトガラ シジュウカラ スズメ カケス ハシブトガラス 6種

〔参加者〕 山崎カツエ 早瀬広司・富 神野拓・敬子 天本治夫 清水幸子 鶴崎展巨 野々村菊 柳沢信雄・千代子 米山露子 佐々木俊一 井上元則 河内一男 藤原直人 羽田恭子 平沼裕 梶浦英子 黒田聖子 清野久子 中野進 依田公子 亀尾紋十郎 高橋明子 細山久男 北原義章 吉岡義明 藤原伸也・宏樹 平井さち子 曾根モト 谷口一芳・登志 小堀煌治 小沢広記
 〔担当幹事〕 平井さち子 小沢広記

野 幌

1979. 2. 18 9:30~13:10

岡 沢 孝 雄

雪は激しく降っていた。風がないのが好運であった。三々五々頭と肩に雪を積らせ国鉄大麻駅から野幌森林公園に向う。公園に入るコースに沿って一列一団となって歩く。スキーを付けると、とたんに心が躍り走り出したくなるのを押え、ゆっくり当りを見回し鳥を探す。鳥にとっては余り好ましくない日和なのだろう。姿を見せない。この探鳥会に参加した仲間5人、4人は本州出身で、うち1人はその日が初めてのスキーというのだった。札幌北区役所から歩くスキーを借りて来て三晩北大農場でトレーニングをした後の参加である。私も2年半ぶりの北海道であったし、雪の中で人間の方が喜々としていた。

雪の降る林は何とも淋しいものである。雪粒にかすんだ谷向いの斜面からキツツキのドラミングが響いてくる。ヤマガラもゴジュウカラも時折遠くに姿を見せるだけで、鳥を見ることに慣れない私には、双眼鏡を使っても皆灰色に見え区別がつかなかった。トドマツの太い幹に大きく口を開いた穴はクマゲラの掘ったものだという。クマゲラは野幌の森林公園には数える程しか棲んでいないと聞き、広いとは思えないこの林に隔離された鳥も淋しいだろうと感じながら歩く。マヒワの群れが稍に止っている木があった。空とのコントラストを失い枯れ残った葉のように見える。双眼鏡のレンズに雪がついてよく見えなかったが、これもまたひどく寒そうに羽をふくらませ、まん丸になっている。午後1時過ぎ、探鳥会は終わったが私達はまだ暫く公園に残ることにした。（後続文省略深謝編集部）

〔記録された鳥〕 トビ ヤマゲラ アカゲラ オオアカゲラ コゲラ ハシブトガラ ヒガラ ヤマガラ ゴジュウカラ マヒワ ウソ カラス 12種 エゾリス

〔参加者〕 石井忠雄 島根松朗 藤沢忠勝・伸也・宏樹 岡沢孝雄 中野進 鶴崎展巨 星川和夫 大谷剛 村野紀雄 早瀬広司・富 柳沢信雄・千代子 羽田恭子 藤原直人 武田忠義 白沢昌彦 19名

〔担当幹事〕 柳沢信雄 柳沢千代子





鳥たちの、最も生き生きとした季節です。彼らのくらしぶりを、そっとのぞきに行きませんか。

＜野幌探鳥会＞

とき 昭和54年4月30日(月)
5月13日(日)

集合 国鉄 大麻駅待合室 午前8時30分集合

＜ウトナイ探鳥会＞

とき 6月10日(日)

集合 国鉄千歳線 植苗駅前 午前9時集合

＜福移探鳥会＞ 石狩川畔

とき 7月1日(日)

集合 札幌市営バス札幌線「福移入り口」停留所に

午前8時30分集合

・探鳥会には、観察用具、筆記用具、昼食、雨具等を持参して下さい。いずれも2時～3時頃までに終了します。ひどい暴風雨でないかぎり行きます。

・探鳥会についてのお問合せは、柳沢 851-6364 か羽田 611-0063 へ。

野幌森林公園を歩きましょう

上記の探鳥会のほか、次のように探鳥散歩を行います。どうぞご参加下さい。

とき 4月15日 5月27日 6月24日 7月15日

集合 午前8時30分 大麻駅待合室

・探鳥散歩についてのお問合せは、上記、柳沢か羽田へ。



◆探鳥会幹事から

野鳥愛護会の活動の中心は野鳥だよりの発行と、探鳥会の実施にあります。しかし、全道、或は全国に散在する会員の、探鳥会に対する声を一堂に集まってきく機会は持て

ません。探鳥会実施後の報告は、参加者のレポートにより野鳥だよりに掲載されますが、探鳥会に対するご意見ご希望、苦情等、どんなことでも結構ですから、係までお寄せ下さい。皆様の声をお待ちしています。

探鳥会幹事代表

064 札幌市中央区円山西町491 羽田恭子

◆寄贈文献 次の文献の寄贈を受けました。事務所にありますからご覧になりたい方はご一報ください。

- ・十勝野鳥だより No.7 (日本野鳥の会十勝グループから)
- ・北の野鳥 No.13 (日本野鳥の会 迫川野鳥の会)
- ・野鳥さいたま No.1～No.5 (日本野鳥の会埼玉県支部から)
- ・野鳥ニュース No.3 (白老町立飛生小学校から)
- ・私たちの自然 (日本鳥類保護連盟)

・かっこう (日本野鳥の会札幌支部)

なお、今後とも会報交換などを増進し、本誌情報の質を高めたいと思いますのでご協力をお願いします。

◆日本野鳥の会全国大会が今年、北海道で開かれます

・日時 昭和54年6月16日～17日

・会場 苫小牧市ウトナイ湖畔ウトナイ観光ホテル

◆野鳥写真展 愛鳥週間中の6月5日～18日に札幌市中央区北4西4の三菱信託銀行札幌支店ロビーにおいて本会会員の写真を主とする野鳥展を予定しています。よい写真をお持ちの方は事務局までご連絡ください。

◆今年もチェックリストをよろしく

昨年は恐らく全国でも初の試みであるチェックリスト調査に協力していただきましてありがとうございます。あいにく日本野鳥の会の繁殖状況調査とかち合っ

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

記事を御覧になっていかがでしたか。本号は今までとちょっとちがう点があります。それは増ページになっていること(今回限り)、探鳥地案内を拡大し、探鳥会案内を終ページの見やすいところに位置づけたこと、整理用の穴をあけたことなどです。なつかしい百武さんの報告、斎藤さんの鳥と樹木の関係や長井さんの中国報告も注目していただけたかと思ひます。

メインの濤沸湖の鳥相の城殿さんは海外青年協力隊

に加わって近くパラグアイに2年間の予定で行くことになっています。また編集幹事の小堀さんも近く渡欧のついでに鳥を見てくると言っています。そのうち外国関係のすばらしい原稿が本誌を飾ることでしょう。

一方、外国に行かず(行けず?)平凡?な鳥を追っている私たちにとっても鳥がきれいに、沢山見えるすてきな時候となりました。編集幹事一同も早や1年の任期を迎えたわけです。いたらぬことばかりだったことをお詫びしつつ、寄稿や助言をくださった多くの方々

(村野記)

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 1,000円 (会計年度4月より) 郵便振替 小樽 18287
☎060 札幌市中央区北4条西5丁目(林業会館) 北海道国土緑化推進委員会内 ☎(261)9022